

京 焼 の 萌 芽

—「軟質施釉陶器」について—

京都市考古資料館 永 田 信 一

はじめに

仁清や乾山の焼きものは初期の京焼とされ、日本を代表する工芸品として評価が高い。両者の作品は、江戸時代を通じ陶工の手本とされ、それらの作品は写され、工夫が重ねられ、後の陶工に大きな影響を与えた。現在もそれを手本に更なる創造が加えられ、京都の伝統産業として根付いている。

かねてこの京焼きの祖とされる仁清や乾山の焼きものが、余りにも完成された領域にあることから、これらの焼きものに遡って、その源流となる焼きものが京都に存在したのではないかと考えた。その糸口となったのが「軟質施釉陶器」の発見である。器形には、天目茶碗、向付、半筒茶碗、茶碗、鉢、皿、茶入れなどがあり、日常の什器ではなく、茶の湯と関係深い焼きものである。

最近では京焼の成り立ちと深く関係していると考えている。ここでは、「軟質施釉陶器」を取り巻く周辺の状況と京焼きの萌芽を示す成果をとりまとめ、紹介してみたい。

「軟質施釉陶器」発見の経緯

1970年代後半から1980年後半にかけて、市街地再開発事業を契機に、実施された発掘調査は、近世陶磁器の発見に繋がり、多種多彩な陶磁器の集積をもたらした。しかし、この間、地下鉄丸線発掘や平安京跡の調査、伏見城下の調査などでは、志野や織部などが出土していたが、まだ量的に限られ、全体を見通せる状況ではなかった。

1987年から1988年にかけて行なわれた中京区弁慶石町の発掘調査で、信楽や備前、唐津、志野、瀬戸黒などが大量に出土し、この調査で、洛中の桃山時代の茶陶が出揃い、器種、器形がほぼ網羅できるようになった。それを受け、1989年3月31日から東京、根津美術館で「桃山の茶陶」展が開催された。洛中出土の茶陶が紹介され、これまで無かった企画だけに全国的に注目された。

展示に向けて一同に集められた陶磁器の整理分類から生み出されたのが、この「軟質施釉陶器」といわれるものである。整理作業で生産地を特定できない特殊なものがあり、それが「軟質施釉陶器」であった。従来知られていなかった鉛釉系統の低火度焼成の焼きもの、「軟質施釉陶器」がこの時認識されるようになったのである。

研究史上登場するのは、1989年4月に発行された「陶説-特集・洛中出土の茶陶-」である。最初に問題にしたのは、小森俊寛氏である。氏はこの「軟質施釉陶器」を初期京焼として紹介している。編集後記で、村山武氏は「私は特に初期京焼の出土に興味をひかれた。低火度釉の施釉陶で、ロクロで成形された京焼の茶碗、いったい、こんな作品はどこに伝世しているだろうか」と当惑気味な驚きもって迎えられ、発表を注目している。

「軟質施釉陶器」という用語

まず指摘しなければならないのは、「軟質施釉陶器」という用語である。この用語は、文献や伝世品にもとづく美術史や陶磁史の観点から生まれた用語ではなく、発掘にもとづく考古学の観点から生まれた用語である。

小森氏の「初期京焼」『陶説』では、「軟質施釉陶器」は、「施釉軟質陶器」と呼称されている。黒釉系統の「楽茶碗」とは区別され、「ロクロ成形の彩文した施釉軟質陶器と手づくねを基本としている楽茶碗とは、基本成形や彩色などが異なるため一見異質に見えるが、両者の出土遺物を見る限り、素地、釉、基本器形など共通する点が多い。」と述べられ、楽茶碗との共通項もあるとされる。用語としては「施釉軟質陶器」として出発し、「軟質施釉陶器」という用語が生れるのはこの論文後のことである。

早くも1990年6月には、裏千家センター講堂で、研究会『近世都市遺跡出土の施釉軟質陶器-楽とその周辺-』が開催され、発表者の鈴木裕子、堀内秀樹、續伸一郎、松尾信裕等、各氏は「施釉軟質陶器」ではなくて「軟質施釉陶器」を用いている。

各地の近世都市遺跡の調査による資料の増加につれ、以後、様々な用語が用いられる。「京焼系」、「京焼系軟質施釉陶器」、「軟質陶器」、「楽系」、「初期京焼」などである。

「軟質施釉陶器」と呼称する場合、当初は桃山時代から江戸時代初期の陶器であると意識されていたが、江戸時代中期以後のものも加え、現在では「軟質施釉陶器」とされる場合がある。硬質のものは、「軟質施釉陶器」とは区別すべきかもしれない。

1999年、鈴木裕子氏は、「もう一つの織部-軟質施釉陶器-」で、全国レベルで、「軟質施釉陶器」が出土していることを述べられている。この頃から用語として、「軟質施釉陶器」が定着している。

筆者は「軟質施釉陶器」という用語を使用したのは1996年6月の第92回京都市文化財講座からであるが、2001年12月、「瀬戸大窯とその時代」シンポジウムで、「初期の京焼」として提起したが、今は元にもどし「軟質施釉陶器」の用語を用いている。

「軟質施釉陶器」の技法

森村健一氏は、「軟質施釉陶器」を「土器のように軟らかく低火度の黒、赤、淡褐色釉等を掛けただけの文様のない陶磁器である。」と述べているが、「軟質施釉陶器」は、手で持ち上げると美濃の製品や唐津の製品と違い、焼き締まっておらず、誰が持っても軽く感じられる。その技法とはどのようなのだろうか。

素焼きと白化粧

未成品が京都の三条界限から出土している。弁慶石町では、素焼きの素地に白泥を掛け白化粧された施釉前段階の碗が出土している。中之町からも素焼きの素地に白泥を掛けた施釉前段階の茶碗が出土した。元本能寺南町では、「軟質施釉陶器」の素地が大量に出土しており、白化粧された素地がある。東八幡町でも白化粧された素地や色絵が施されたものがある。

白泥を用いた化粧掛けの技法は、前代の国内にはない技法であり、中国華南三彩にはこの技法があり、渡来工人による華南三彩の影響を考えると可能である。

鉛釉系統の焼きもの

低火度焼成を特長とした鉛釉系統の焼きものである。黒楽茶碗は高温で焼成され、低火度焼成では

ないとされる。「軟質施釉陶器」は、低火度焼成で製作されたものとするれば、黒楽茶碗はその範疇には入らないが、短時間で焼成されるため、焼き締まらず軟質である。楽茶碗は手びねりで作られるが、「軟質施釉陶器」にはロクロ引きのものがある。高台の作りや器形などを検討するとロクロ回転が右回りであり、技法的に美濃の製品との関連を伺わせる。

文様構成

赤、黒の文様のない茶碗、内黒で外面に緑彩のあるもの、意匠が織部に近い文様構成のもの、彫り文様がある華南三彩とよばれる中国南方の製品に似たものがある。見込みに橋や草文を描く絵画の手法を用いる鉢もある。これらの要素から、織部文様、華南三彩、大和絵などとの関連が認められる。

「軟質施釉陶器」の窯

製作には、一般的に、内窯が使用された。どのような内窯かまだ明確ではないが、樂吉左衛門氏は、樂焼の源流として「軟質施釉陶器」を位置づけられている。樂焼窯に近い金炭窯のような移動可能な簡単な構造のものと考えられる。発掘でその痕跡を見つけることは難しい。木立雅朗氏は「特に金炭窯は遺構として認識できないはずであるから、窯部材などを中心とした遺物の検討が不可欠である」と述べている。木立氏が指摘するように、遺構ではなく、窯道具や焼けた壁などの遺物に注意する必要があるだろう。その点で、弁慶石町から出土した緑彩が付着したサヤ鉢片が注目される。また、京都大学病院構内から出土した黒釉の付着したフィゴ窯の内窯や三叉トチンは、江戸時代中期の猪八乾山のものではないかとされる。元本能寺南町では、焼き損じたものや内窯の破片があり、「軟質施釉陶器」の生産が行なわれていた。東八幡町では、未成品や釉薬の原材料を混ぜて溶融した坩堝が出土している。

「軟質施釉陶器」の分類整理

全国各地で量は限られるが一様に出土する傾向にある。とくに緑彩のあるタイプの碗は、分布にかなりの拡がりを見せ、京都、大坂、堺など畿内を中心に、長崎、江戸などでも出土している。流通経路を明らかにして行くために出土地点と製品内容を集成することが課題である。

伊藤嘉章氏は、「軟質施釉陶器」の編年の必要性を指摘されているが、しかし、まだ編年を確立するには資料数が限定されている。まず分類整理を確立し、編年の目安をつけたい。その意味で、森村氏は2000年3月、「堺環濠都市遺跡出土軟質施釉陶器」として編年案を提示され、また森毅氏も2000年2月に、「豊臣期大阪の美濃桃山陶」で大阪出土の茶碗の変遷として、「軟質施釉陶器」を豊臣前期、後期、徳川初期の三段階に分け、編年図示された。

2003年11月、平尾政幸氏は「軟質施釉陶器」の生産が行なわれていた元本能寺南町の1035片におよぶ陶片を分類報告している。器形を、碗、皿、台付き皿、三足鉢、台付き鉢、香炉、茶入れ、灯明具に分類された。

伏見では1605年（慶長10）の火災の焼土層（伏見区桃山町立売）より緑彩、内黒の碗、黒釉茶碗などの軟質施釉陶器が出土している。編年の基準となる資料である。

押小路焼の問題

仁清が京で開窯したのは、慶安年間（1648～52）より以前とされ、乾山の『陶工必要』には、樂

焼より古い伝承を持つ押小路焼の陶法のこと触れられている。内窯で焼成されたいわゆる交趾焼の釉法と考えられ、『陶磁製方』では、交趾焼を写した器で、花樹、生類等を地紋に彫って、緑、黄、紫の色絵を付けた器であると記される。また『陶工必要』には京都押小路柳馬場の東で一文字屋助左衛門という人物が押小路焼を製造していたことが記されている。

その南側隣接地の東八幡町で検出された施釉陶器には、素焼きの陶片や釉下彩下絵付け品、「京」、「寶」、「岩倉」、「岩水」、「御菩薩」、「清」、「清閑寺」、「音羽」などの印銘陶片などがある。これらの陶片は、押小路焼と関連する焼きものである可能性があり、これらの未成品は、「軟質施釉陶器」から仁清や乾山の完成された京焼に至る過程を示す好資料である。

榑崎彰一氏は、華南三彩の盤と「軟質施釉陶器」には、器形、文様、釉色の類似性があり、共通点があるとされ、総織部との類似性についても指摘されている。別の視点では、京都中之町で出土した織部意匠の「軟質施釉陶器」を、荒川正明氏は「この低火度鉛釉の織部スタイルの軟質陶が先に京都で作られ、これを美濃窯に大量注文するという可能性さえ考えられる」と記している。これらの所見は、押小路焼の陶法と販売に関連するかもしれない。

「今ヤキ」と「京ヤキ」

2008年、岡佳子氏は「茶会記にみる今ヤキと京ヤキ」『藝能史研究』で、天正期の茶会記にみる「今ヤキ」は「当世の焼物」という意味で、これを「軟質施釉陶器」の茶碗と捉え、時を経ることによって「今」の意味が失われ、呼称が変化したとみている。「軟質施釉陶器」は当初「今ヤキ茶碗」と呼称されたのである。「京ヤキ」の初見は、慶長10年の「肩衝京ヤキ」で、これを瀬戸から導入された本窯焼成の製品ではなく、京都で生産された「軟質施釉陶器」の茶入れと考えられている。本焼窯の京都への導入時期は検討の余地がある。

慶長から元和にかけて「京ヤキ」の販売は、三条界限の「せと物や」が大きな役割を果たした。三条通寺町下がる付近は「せと物や町」と『京都図屏風』や『都記』に記され、『洛中洛外図』（富山勝興寺）では、販売の姿が描かれている。「せと物や町」は、現在の弁慶石町や中之町にあたり、出土した大量の桃山茶陶のなかに「軟質施釉陶器」がある。未成品や窯道具も出土していることからすれば、「せと物や町」では「軟質施釉陶器」が生産され販売されていたと考えられる。

まとめ

樂家につながらず、内窯で作陶した「軟質施釉陶器」の存在が明らかになったことは、大きく評価されてよい。「軟質施釉陶器」は桃山時代以後の京焼の展開を検討するうえで、陶磁生産や流通、茶の湯の文化に関連して、日本陶磁史上重きをなすと考えられる。今後、詰めなければならない課題も多いが、仁清や乾山を産み出す創意工夫の背景にもなったとも思われ、また、中国の華南三彩とも関連して、「軟質施釉陶器」の問題は、日本陶磁史をひも解く鍵として今後とも注目される。京焼の源流ともいうべき「軟質施釉陶器」の展開は、多様な焼きものである京焼の本質と深く関わっていると思えて成らない。

引用・参考文献

- ・小森俊寛「初期京焼」『陶説-特集・洛中出土の茶陶-』433号日本陶磁協会 1989年
- ・永田信一「京都出土の桃山茶陶」『桃山の茶陶』根津美術館図録 1989年
- ・鈴木裕子、堀内秀樹「東京大学本郷構内遺跡出土の軟質施釉陶器」研究会『近世都市遺跡出土の施釉軟質陶器-楽とその周辺』関西近世考古学研究会 茶道資料館 1990年
- ・續伸一郎「堺環濠都市遺跡出土の軟質施釉陶器」 同
- ・松尾信裕「大阪城跡出土の軟質施釉陶器」 同
- ・永田信一「初期京焼について」『リ-フレット京都』no25 1991年
- ・松尾信裕「大阪出土の桃山陶磁」『桃山の華』土岐市美濃陶磁歴史館図録 1993年
- ・西田宏子「呉州赤絵と交趾三彩のうつわ」『華南のやきもの』根津美術館 1998年
- ・鈴木裕子「もう一つの織部-軟質施釉陶器-」『美濃のやきもの-黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の系譜-』佐野美術館 1999年
- ・植崎彰一「桃山陶器の成立と展開」『京都市考古資料館 20周年記念文化財講座資料』1999年
- ・永田信一「楽と京焼」『やきもの名鑑3』講談社 1999年
- ・荒川正明「京焼と乾山陶-その伝統と創造-」『乾山と京のやきもの展-尾形乾山開窯三〇〇年・京焼の系譜-』1999年
- ・森村健一「考古学から見た安土・桃山茶陶-堺出土の軟質施釉陶器-」『羽衣國文』第13号 2000年
- ・森毅「豊臣期大阪の美濃桃山陶」『豊臣期のやきもの-大阪城出土の桃山陶磁-』土岐市美濃陶磁歴史館 2000年
- ・永田信一「洛中出土の桃山陶器」『三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館 2001年
- ・樂吉左衛門『樂ってなんだろう-樂焼創成-』2001年
- ・永田信一「京都の陶磁器とその流通」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品-東南アジア的視点から-資料集』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2001年
- ・永田信一「洛中出土の茶陶について-三条界限出土の茶陶と軟質施釉陶器をめぐって-」『東洋陶磁史-その研究の現在-』東洋陶磁学会三十周年記念 東洋陶磁学会 2002年
- ・木立雅朗「京焼の上絵窯について」『金沢大学考古学紀要』26号 金沢大学文学部考古学講座 2002年
- ・千葉豊「乾山焼と蓮月焼-京都大学病院構内の発掘資料から-」『第158回京都市考古資料館文化財講座資料』2003年
- ・岡佳子「京焼陶工と国焼」『近世後期における関西窯業の展開-国焼と京焼-』関西陶磁器研究会 2003年
- ・平尾政幸「軟質施釉陶器の生産について」『平安京左京四条二坊十四町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- ・鈴木裕子「仁清焼の流通-消費地の出土資料から-」『仁清の茶碗』根津美術館 2004年
- ・永田信一「軟質施釉陶器の諸問題-京都出土の軟質陶磁器を通じて-」『軟質施釉陶器の成立と展開』関西陶磁器研究会 2004年
- ・木立雅朗「京都の陶器窯」『窯構造・窯道具からみた窯業』関西陶磁器研究会 2005年
- ・小檜山一良「京都・押小路焼の発掘調査」『京焼の成立と展開-押小路、栗田口、御室-』関西陶磁器研究会 2006年
- ・永田信一「京都市域出土の軟質施釉陶器」『考古学から見た安土・桃山の茶の湯文化』関西考古学研究 14 2006年
- ・尾野善裕「京焼-都市の工芸-」『京焼-みやこの意匠と技-』2006年
- ・植崎彰一「長次郎作彩釉獅子」『瀬戸市埋蔵文化財センター-研究紀要』第13輯 266年
- ・荒川正明「雅遊の陶」『乾山の芸術と光琳』2007年
- ・小檜山一良「押小路焼から京焼きをさぐる」『江戸期の京焼』淡交増刊号 2007年
- ・岡佳子「茶会記にみる今ヤキと京ヤキ」『藝能史研究』第180号 2008年
- ・岡佳子「桃山から江戸時代初期の茶陶流通と京都」『藝能史研究』第181号 2008年

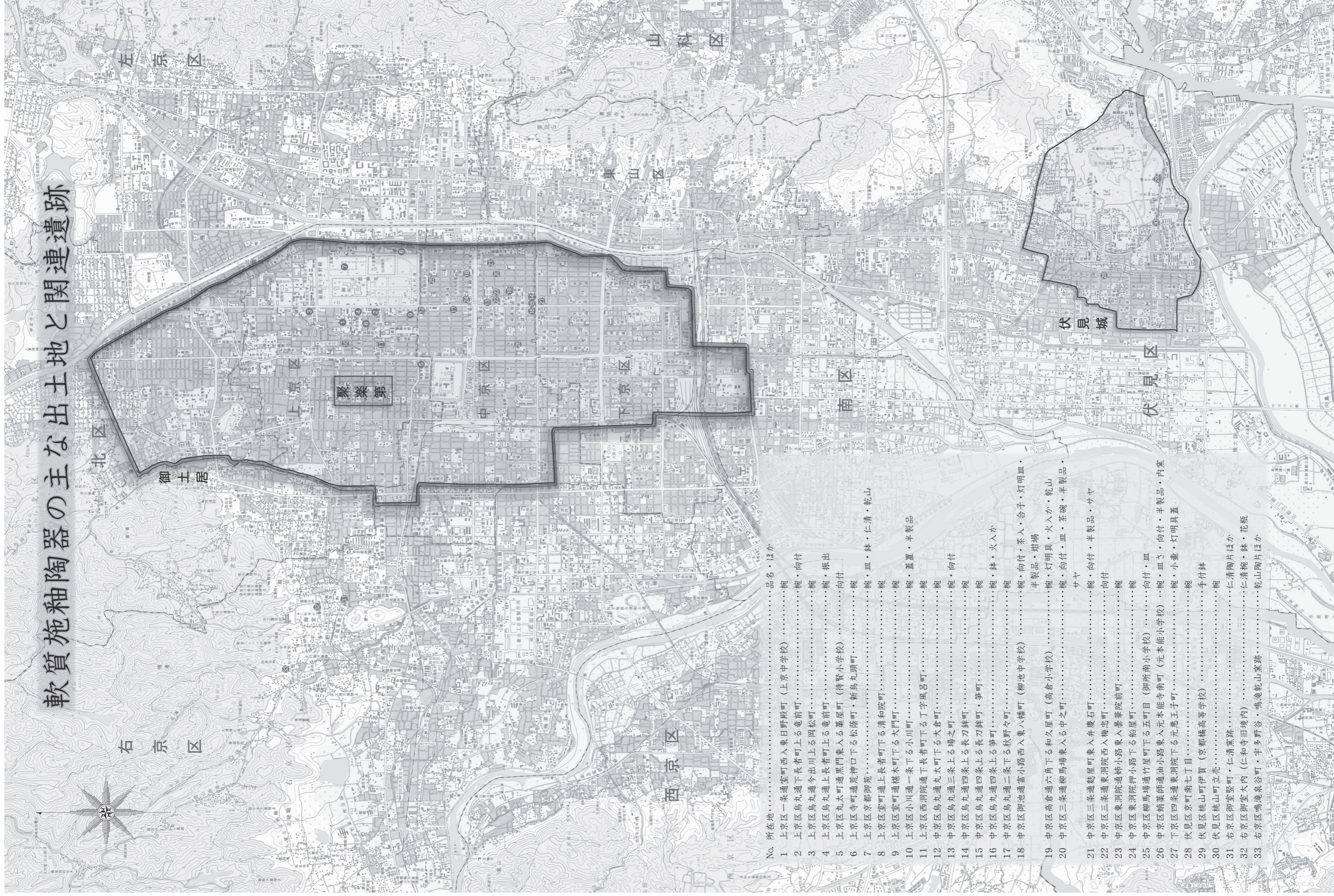


素地に墨描の楼閣山水文（東八幡町出土）



軟質施釉陶器（東八幡町出土）

軟質施釉陶器の主な出土地と関連遺跡



- | No. | 所在地 | 品名・ほか |
|-----|-----------------------------|-----------------------|
| 1 | 上京区一条通室町西入東日野殿町 (上京中学校) | 碗 |
| 2 | 上京区烏丸通下長者町上る竜前町 | 碗・向付 |
| 3 | 上京区烏丸通今出川上る岡松町 | 碗 |
| 4 | 上京区烏丸通上長者町上る竜前町 | 碗・振出 |
| 5 | 上京区丸太町通黒門東入る藁屋町 (待賢小学校) | 碗・向付 |
| 6 | 上京区寺町通荒神口下る松蔭町・新烏丸頭町 | 碗 |
| 7 | 上京区京都御苑 | 碗・皿・鉢・鉢・仁清・乾山 |
| 8 | 上京区室町通上長者町下る清和院町 | 碗 |
| 9 | 上京区室町通榎木町下る大門町 | 碗 |
| 10 | 上京区小川通一条下る小川町 | 碗・蓋置・半製品 |
| 11 | 上京区西洞院通下長者町下る丁字風呂町 | 碗 |
| 12 | 中京区烏丸通丸太町下る大倉町 | 碗・向付 |
| 13 | 中京区烏丸通三条上る場之町 | 碗 |
| 14 | 中京区烏丸通四條上る長刀鉢町 | 碗 |
| 15 | 中京区烏丸通四條上る長刀鉢町・笋町 | 碗・鉢・火入か |
| 16 | 中京区烏丸通四條上る笋町 | 碗 |
| 17 | 中京区烏丸通二條下る秋野々町 | 碗 |
| 18 | 中京区御池通常小路西入東八幡町 (柳池中学校) | 碗・向付・茶入・合子・灯明皿・半製品・埴瑯 |
| 19 | 中京区高倉通六角下る和久屋町 (高倉小学校) | 碗・灯明具・火入か・乾山 |
| 20 | 中京区三条通柳馬場東入る中之町 | 碗・向付・皿・茶碗・半製品・サヤ |
| 21 | 中京区三条通麩屋町東入弁慶石町 | 碗・向付・半製品・サヤ |
| 22 | 中京区三条通東洞院西入梅忠町 | 碗・向付 |
| 23 | 中京区東洞院通神小路東入聚華院前町 | 碗 |
| 24 | 中京区東洞院通竹屋町下る五町目 (御所南小学校) | 碗・向付・皿 |
| 25 | 中京区柳馬場通油小路東入元本能寺南町 (元本能小学校) | 碗・皿さ・向付・半製品・内薫 |
| 26 | 下京区四條通東洞院下る元憑王子町 | 碗・小壺・灯明具蓋 |
| 27 | 伏見区京町南七丁目 | 碗 |
| 28 | 伏見区桃山町伊賀 (京都橋高等学校) | 手付鉢 |
| 29 | 伏見区桃山町立売 | 碗 |
| 30 | 伏見区御室町 (仁和寺旧境内) | 仁清陶片ほか |
| 31 | 右京区御室大内 (仁和寺旧境内) | 仁清碗・鉢・花瓶 |
| 32 | 右京区鳴滝泉台町・宇多野台 | 鳴滝乾山窯跡 |
| 33 | 右京区鳴滝泉台町 | 乾山陶片ほか |

京 焼 年 表 [1573年(天正元)～1743(寛保3)]

西暦(和暦)	焼きもの関連	出来事
1573年(天正1)		室町幕府滅亡
1574年(天正2)	長次郎、天正二年銘「彩釉獅子」を制作	信長、千利休ら堺衆を招いて相国寺にて茶会(『宗久日記』)
1580年(天正8)	利休、「ハタノソリタル茶碗」を使用(『天王寺屋会記』)	
1582年(天正10)		本能寺の変、織田信長没
1585年(天正13)	「今ヤキ」の初見、「今ヤキ茶ワゴン」(『松屋久政他会記』)、この年の地震で倒壊した近江長浜城下より黄釉灰起出土(軟質施釉陶器)	
1586年(天正14)	長次郎、「宗易形茶ワゴン」を制作(『松屋会記』)	この頃「唐茶碗」が隆り、「今焼茶碗」が高麗や瀬戸茶碗とともに当世の流行の数寄道具となる『山上宗二記』
1587年(天正15)	京で「ヤキ茶碗」の使用(『宗湛日記』)	豊臣秀吉、北野大茶会を催す
1589年(天正17)		長次郎没
1590年(天正18)	聚楽第の茶会で、利休「黒茶碗」を用いる(『宗湛日記』)	秀吉、洛中町割を実施
1591年(天正19)		千利休自刃、津田宗及死去、秀吉、お土居を築く
1592年(文禄1)		秀吉、朝鮮出兵(文禄の役)
1593年(文禄2)	「文禄二年」銘黄瀬戸皿破片(窯下窯)	今井宗久死去
1594年(文禄3)	石田三成、伏見で「今ヤキ」を使用	秀吉、伏見城を築城
1595年(文禄4)	宗慶、文禄四年銘「三彩獅子香炉」を制作	この頃、朝鮮半島より多数の陶工渡来し、各地に開窯
1598年(慶長3)		伏見城にて、秀吉没
1599年(慶長4)	古田織部、「セト茶碗ヒツミ候也へウゲモノ也」と記す茶碗、「香合今ヤキ」を用いる(『宗湛日記』)	
1600年(慶長5)		関ヶ原の戦い
1603年(慶長8)	「慶長八年」銘黄瀬戸向付(京都市上京区出土)	徳川家康、江戸に幕府を開く
1605年(慶長10)	「京ヤキ」の初見、「肩衝 京ヤキ」(『宗湛日記』)、この年の伏見火災の焼土層より軟質施釉陶器出土	この頃、美濃元屋敷窯の開窯、徳川秀忠、征夷大將軍となる
1607年(慶長12)	「慶長十二年」銘匣鉢(元屋敷窯)	
1608年(慶長13)	「シユ樂黒茶ワゴン」の初出(『松屋久重他会記』)	
1611～1614年(慶長16～19)		角倉了以、高瀬川の開削
1614年(慶長19)	「慶長十九年」銘匣鉢(窯ヶ根窯)	大坂冬の陣
1615年(元和1)	本阿弥光悦、鷹ヶ峯の地を拝領、以後作陶活動を行なう	大坂夏の陣、古田織部自刃
1616年(元和2)	李參平、泉山に白磁鉢を発見、磁器焼成を始めるという	徳川家康没
1621年(元和7)	秋田藩江戸屋敷、秀忠の饗応のため、茶事会席の「京ヤキ」の平皿、坪皿を注文	
1622年(元和8)	「元和八年」銘青織部燭台(大富東窯)	
1623年(元和9)	「元和九年」銘エブタ(窯ヶ根窯)、伊賀茶碗「元和九年」銘	徳川家光、征夷大將軍となる
1624年(寛永1)	紀州藩江戸屋敷にて、秀忠の饗応のため、茶事会席の「京焼皿」を使用、この頃までに、京都三条界限に「せと物や町」(『京都凶屏風』)	
1626年(寛永3)	「茶碗は年々に瀬戸よりのほりたりる今焼のひつみたる也」の記載(『草人木』)	
1631年(寛永8)		この頃小堀遠州、家光の茶湯指南
1635年(寛永12)	藤堂家の招きで、「京三条」の陶工が伊賀に赴き、水指を江戸に送る	神屋宗湛没、日本人の渡航、帰国を禁止する(鎖国令)
1637年(寛永14)	この頃以前に元本能寺南町で、軟質施釉陶器を制作、鍋島藩、有田皿山の整理統合を行なう	本阿弥光悦没、島原の乱
1638～1643年(寛永15～20)	栗田口焼、八坂焼、清水焼の名前登場	
1644年(正保1)	この頃、有田の陶工、赤絵に成功(初代柿右衛門)	明滅亡、清が中国を統一
1647年(正保4)	この頃、野々村仁清、仁和寺前に御室窯開窯か	小堀遠州没
1649年(慶安2)	御室焼色絵の記述登場	
1658年(万治1)	尾形光琳誕生	
1663年(寛文3)	尾形乾山誕生	
1690年(元禄3)		利休百回忌
1694年(元禄7)	尾形乾山、鳴滝泉谷の山屋敷を二条家より拝領	
1699年(元禄12)	尾形乾山、鳴滝泉谷で、乾山窯開窯	
1712年(正徳2)	尾形乾山、二条丁字屋町へ移転	
1716年(享保1)	尾形光琳没	
1743年(寛保3)	尾形乾山、江戸にて没	